

NIE を活用したメディアリテラシー研究

－「ウクライナ問題」に対する伝えること・捉えることの認識から－

中平一義（上越教育大学），野寄雄太（相模原市立新町中学校）

1 はじめに－問題の所在と目指すメディアリテラシー

本発表の目的は子どものメディアリテラシーを育む教育実践開発と、実践の効果を検証することである。本発表で開発した教育実践は、子どもが新聞の見出しで使用されたことばの意味と、そのことばの使用に込められた意図を新聞記者自身のことばに思いを巡らせることにより、伝えることと・捉えること（伝わること）について自らの認識を省察するものである。本発表が子どもに育成を目指すメディアリテラシーの位置づけは、中平（2021）で示した「情報読解力育成の現代的展開」の四段階に基づく。四段階とはすなわち、【1】「メディアから情報を取り出す力」、【2】「情報の背景をクリティカルに考える力」、【3】「情報をクリエイティブに創造する力」、【4】「情報読解力により育まれる思考」である。【1】については、フェイクニュースを例にすでに考察をした。本発表では【2】や【3】を主な対象とした。

2 開発した授業とその流れ

授業で題材にしたのは、2022年2月24日からのいわゆる「ウクライナ問題」を伝えた新聞の見出しである。授業のねらいは、「メディアが伝える情報についてどのような差異があるのか、なぜそのような違いがあるのかを考える。」である。子どもたちは、はじめに「ウクライナ問題」を伝えるある写真を見て自ら見出しをつけた。次に、実際に各新聞社が使用した見出しのことばについて、使われていることばに着目して考察をした。その後、他社とは異なることばを使用した新聞記者が見出しに込めた思いや、新聞における見出しの意味の説明に耳を傾けた。子どもたちは記者の思いを受けあらためて見出しをその意図を明確にしながらか成した。

3 実践からの考察

子どものワークシートを分析すると、はじめに写真から想定される状況から戦争ということばを使った見出しを考えた子どもが多かった。ことばの意味調べと新聞記者の見解を聞いた後、見出しを再考させた結果、同じ写真でもウクライナの人々の思いや願いを想像し、見出しに詩的なことばを使う子どもが増加した。再考した見出しについてある子どもは「被害を受けている人たちの苦しみは伝わってくるけれど、実際どんな攻撃をされたのかが分からない」と述べた。このことから、自らが発信する情報で相手に伝わることと、伝わらないことの両面を意識し、情報を創造することに取り組む姿が見られた。

4 成果と課題

数回の見出しの作成や新聞記者の思いに耳を傾けることにより、情報を受け取るいくつかの視点を獲得できた。すなわち、伝える側の意図が込められた伝えたいこと、それを相手が捉える（伝わること）ことである。このような視点は、情報をとりまくバイアスの認識による評価と事実の抽出に寄与できると考えた。一方で、今回は読解力育成の現代的展開の【1】との接続はできていない。【1】から【3】を関連させて実施することにより【4】までを育成し、情報に主体的に関わる市民を育成したい。